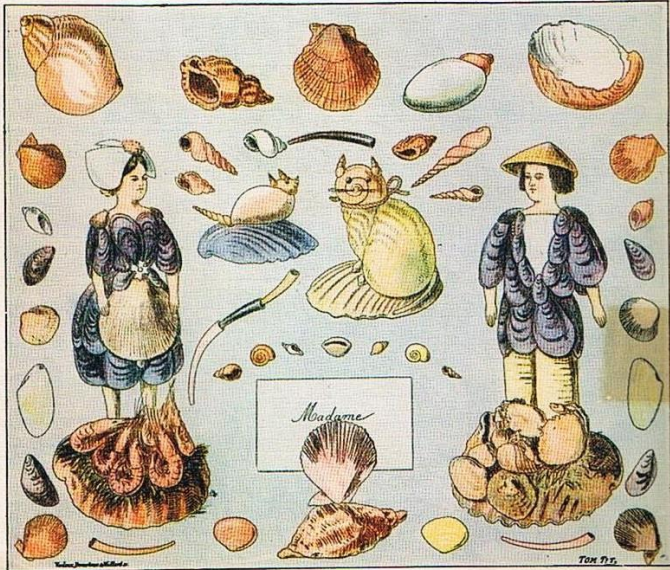


# 子どもの館

1978年 1 月号

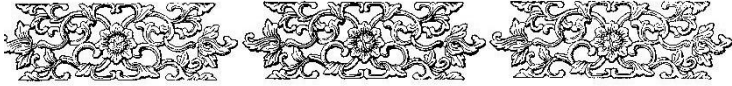
M・エンデ・結城昌治・さのようこ・レクオン

昭和53年1月7日発行 ■ 田代 1 頁 ■ 白紙行 ■ 第 6  
巻第 1 号 ■ 昭和53年7月13日第 3 刷発行 ■ 発行所



貝がらを使った工作

Kodomo no Kan là tạp chí nhi đồng Nhật Bản, xuất bản số tháng 1 năm 1978 có đăng bài của tập II về truyện cổ VN



● 生きている民話 17 — ベトナム —

## 「巨大」なうそつき

レ・クオン 訳

Nguyễn Đăng Chi 監 著 "Kho Tàng  
Truyện Cổ Tích Việt Nam" vol.  
2, (Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã  
Hội Hà Nội 1974)

昔、あるところに「巨大」という名前の青年がいた。両親が早く亡くなり、おじさんとおばさんの世話になっていた。クオイは機敏で、人をだますことにかけてはだれよりもうまかった。

村に、ひとりの金持ちの老人がいた。老人はクオイを信じていなかった。ある日老人はクオイを呼んで言った。

「おまえは人をだますのが上手だそうだな。わしは今、家の中でこうして坐っているが、おまえはわしを門前に行かせることができるかな。もしできたら、ほうびに五銭くれてやる。ここにいるみなが証人だ」

クオイは頭をかかえていたが、こう言った。

「おじさんがここに坐っていたんでは、おじさんをだます準備ができないよ。おじさんが門のとこまで行って、家へ入らせるようにだますというなら、できるんだけどなあ」





それなら、と老人は門のところへ行つた。するとクオイは大声で笑い、言った。

「ほら！ ほくはおじいさんをだまして、門まで行かせたぞ！」  
老人ははずかしく思い、納束どおりクオイに五銭与えた。

さて、クオイのいるおじいさんの家では、大きな豚を二頭飼っていた。家の者がみな出かけたある日、クオイは屠殺人を呼び、その豚を安く売りはらった。そのとき、豚のしっぽだけをもらいうけておいた。クオイには、ひそかな企みがあったのだ。

庭に小さい穴を掘ると、しっぽの先だけ地面の上に出し、埋めてしまった。そして、おばさんが帰ってくると、心配そうに言った。

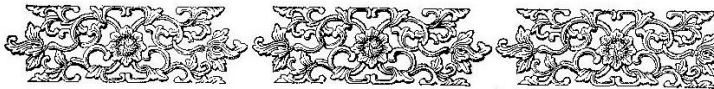
「おばさん、たいへんだ！ だれかが豚を盗んで、地面の下に連れていっちゃったよ！」  
それから、しっぽのところへおばさんを連れていって、指さして言った。

「さあ、このしっぽを見張っていてね。もつと下へ行ったり、切られたりしないように。その間にぼくが掘り出してみようから。ひょっとして、豚が戻ってくるかもしれないからね」  
自分の豚がなくなつてはたいへんと、おばさんは、「早く掘り出して」とクオイに言った。黙って土を掘っていたクオイは、かんとんに土から抜けたしっぽを見ると言った。

「もうだめだ！ 豚は地下に行っちゃった！」

ある日のこと、クオイは空のざるをもち、おじいさんと連れだって市場へと出かけた。道中、クオイは、やおら道はたへ寄り、そこにあった水牛のふんの上にざるをかぶせた。おじいさんが何事かと近寄ると、クオイはそのざるを固く押さえて言った。

「うまくやった！ 大きな鳩をつかまえたぞ。手を入れると鳩が逃げちまうから、おじいさん、早く家へ帰って糶をもってきておくれよ。鳩をいけどりにしよう。この鳩はうまさう





だから、これで一杯やるうよ」

一杯と聞いてなまつばが出てきたおじさんは、さっそく網をとってきて、ざるの上にかぶせた。いつのまにか人びとが集まってきていた。おじさんがかごをとりのけてみると……そこにあるのは水牛のふんで、鳩など形も形もない。だまされたとおじさんは、たいへん怒り、市場へ行くのもやめ、クオイを自分の家へ帰してしまった。

またある日のこと、焼けるような暑さの日、クオイはおじさんと畑で働いていた。おじさんはのどがかわき、クオイに、家へ帰り、お茶をもってくるように命じた。家に着いたクオイは、おおあわての様子をし、涙を流し、かすれた声で言った。

「おばさん、たいへんだ！ おじさんがたいへんなことになっちゃった！ 水牛に殺されて、内臓がみんな飛び出っちゃったんだ。畑で、もう死んじゃってるんだ！」

おばさんは「南無三寶」を唱え、畑へとんでいった。

クオイはおばさんに先回りして畑へ行くと、おじさんに向かって言った。

「おじさん！ おてんとうさまにや目はないさ！ おばさんが、家ではしごに登って落ちて、死んじゃったんだ！ だれも気がつかなかったんだよ！」

それを聞いたおじさんは、胸をたたき、泣きながら家へ走っていった。

途中、おばさんと出くわし、なにもかもがわかった。

あいかわらずクオイはうそつき放屁だった。夫婦ともクオイを心から憎く思い、かごの中に入れて、川へ放りこもうとした。

川辺に着くと、クオイは夫婦だのんだ。

「おじさん、おばさん、ぼくには罪がいつばいだ。言うのものはすかしいのだが、ぼくは





昔から、うそつきだった。でもぼくのうそを信じた人がいたこともほんとうだ。じつは、ぼくがうそをつけたのは、一冊の本のおかげなんだ。その本は今、天井裏にあるんだけど、お願いだからその本をもってきてください。たとえ地獄に行くことになっても、あれがあれば安いっぱくれることはないだろうから」

それを聞いた夫婦は、クオイをあわれに思い、家へ向かった。

クオイがかごの中に身を縮めていると、おりよく、ひとりのらい病人が通りかかるのが見えた。クオイは声をはりあげて言った。

「そこのお人、ぼくは前に、あなたのような病気をしたが、かごに入れられたおかげで直ったんだ。ここに入れば水府に行けるし、また戻ってこれるよ。かごをあけて見てごらん、ぼくはもう直ってる」

らい病人は、クオイのことを信じてかごをあけ、そのすばらしい方術をほめた。そして喜んでクオイに申し出た。




「わたしはなんて幸せもんだ。わたしをかごに入れて、ふたを閉めてくれ。ここに金はある金はあなたにあげるから」

クオイは言われたとおりにし、お金をもらって、どこかへ行ってしまった。

さて、家へ帰ったおじさんは、天井裏をいくらかがしても例のうそつきの本が見あたらない。またもやだまされたことを知って、いそいで川へとってかえし、もう何も考えずにかごを押して川へ落とした。かごは水中に沈み、らい病人は死んでしまった。

一万、川のほとりをすんでいったクオイは、真夏の炎天下、暑くてたまらない。橋のところに来たとき、着物をぬいで水浴びをした。お金は手に握っていた。





そこに馬で通りかかった役人が、馬上からクオイが手にお金を握って、水浴びをしているのを見つけた。役人はクオイに呼びかけた。

「その子ども！ おまえは何をしているんだ」

クオイは答えて言った。

「おとうさんの使いで、お金と金箱かねばこをもって出ましたが、橋の上に来たとき金箱を落としてしまったんです。家へ帰ったらおとうさんがどんなに怒るだろう。それを思うと……」

そう言ってクオイは泣いた。

役人は、馬から降り、着物をぬいで、クオイに言った。

「おまえは早くあがれ！ おれはこれから水浴びをするんだ」

内心、クオイの落としたものをひとりじめしようと思つた役人は、川に入った。

クオイは水から出ると、役人の着物を着た。それを見て驚いた役人は、

「いったい何をするんだ」

とたずねた。するとクオイは、

「ぼくはとても寒いんです。あなた様の着物を着せてもらいます」

と答えた。

役人はクオイに名前と出身地をたずねた。クオイは、

「姓はバイといい、名はジウンといいます。バラ奥ボンロン村にいるんです」

と答えた。

役人の姿が見えなくなると、クオイは馬に乗って行ってしまった。

いくらかがしても何も見つからなかった役人は、だまされたと知って、びっくりし、涙





をたてた。そして会う人ごとに「バイ・ジュンという子どもを知らないか」とたずね、人びとにあざけられた。

長いことさがし歩いたが見つかからないまま、役人は家へ帰っていった。

さて、ある日のこと、クオイは馬に乗って、おじさんの家へ帰った。夫婦はびっくりした。クオイを川へ捨ててから、はや二年半近くも経っていた。クオイが今ごろ、こんななりっぱな身なりで戻ってきたのはどういいうわけだろうと、あやしんだ。

するとクオイは言った。

「地下の水府では、親切な人ばかりに会いましたよ。おじいさん、おばあさん、とうさん、かあさん。とうさん、かあさんはとても金持ちだったけど、ぼくはおじさんとおばさんがなつかしくて、こういう身なりで馬に乗って、いそいで帰ってきました！ おじいさんとおばあさんがね、おじさんたちに会いたいから、ぼくといっしょに遊びにくるようにな、言っていましたよ！」

夫婦はそれを聞いて大喜びで言った。

「わしたちも水府へ行けるかね」

「そんなことなんでもないよ。ぼくがしたみたいにかごに入ればいいよ。ぼくが川の中に押し入れてあげるから」

とクオイは言った。

おじさんはいそいで、かごをふたつ作り、川辺へもっていった。おじさんはかごに入るとクオイに押すように命じた。クオイが押すとかごが落ち、ブクブクと泡がたつのが見えた。クオイはそれを見て、





「わっはっは！ おじさんが行く！」  
と言った。

おばさんもクオイに早く押すように言い、クオイはおばさんの入ったかごも川に押し入れた。

その後クオイは、おじさんとおばさんの財産をすべてわがものにした。しかしクオイはさっぱり仕事をしなかったので、やがて財産はなくなり、クオイはまた旅へ出かけたくな

った。  
食べものをもって家を出たクオイは、大きな森へやってきた。ここには象がたくさんいた。象を一通りとめてやるうと思つたクオイは、象の通り道に深い穴を掘り、その上を竹と草でおおっておいた。その翌々日、一頭の象がわなにかかっていた。頭と足が穴にはまり、地上にはおしりとしっぽが出ていた。クオイは象の肛門こうもんを除いて、そのほかの部分ぶぶんを土でおおった。そして象の肛門こうもんをもっと切り開いてから言った。

「ぼくは飛べる象もっているんだ！ 旅路たびぢの心配はもつないんだ」

死んだ象のおいをかぎつけて、からすとふくろうがやってきた。彼らは肛門こうもんから肉を食べつづけ、おなかの中に入れて食べた。はじめは二、三羽だったが、だんだん数がふえていった。

クオイは、象の肉がなくなるときを待った。鳥たちがたくさん象のおなかに入ったあるとき、クオイはとつぜん象の肛門こうもんの穴を閉じた。そして穴から象の体を押し出すと、象の背中にまたがり、象を動かした。すると象のおなかの中の鳥たちは自然に飛びはじめ、象は空高く飛んでいった。





象はあちらこちらと飛んでいった。クオイが、象を止まらせまいと、二、三回象の背中をたたくと、鳥たちはおびえ、羽をたたんだ。象の体は落ちはじめ、たまたま皇帝の宮殿の上に来た。

皇帝と朝廷の廷臣は「天の象」に乗っている人を見ると、ただおそろしがってしまつた。そしてクオイを丁重に、あたかも天上人のように迎えた。クオイは大喜びだった。皇帝にすばらしい象のことを述べると、皇帝は言った。

「わたしはその象に乗りたいたのだが、この世の珍しいものはすべて見たいと思っているのでな」

クオイは答えて言った。

「よろしいですとも。ただしつぎのふたつのことをお守りください。あなた様の服をわたしに着せること。それから海の上に来たら、象の肛門の穴を開けること。象が水を飲みますので」

皇帝に思いとどまらずこのことができる者はだれもいなかった。皇帝は象の背にまたがり、空に飛んでいった。そして海の上に来たとき、クオイに言われたとおり、象の肛門の穴をあけた。すると象のおなかにいた鳥は、たちまち外へ飛び出し、象の体は、皇帝もろとも海の中に落っこちてしまった。

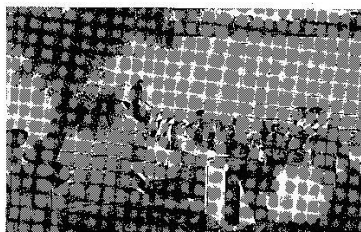
皇帝の服を着たクオイは、その国の皇帝になった。

\* 水の底にある竜宮のこと。その王、竜王は方術（神仙の術）の心得があり、人を助ける力がある。



# 故郷の思い出

レ・クオン



フ・市のドン・カン女子中学生の登校風景

私が幼いときを過ごしたのは、ベトナム中部のシュエン・という村でした。

見わたすかきりに広がる果樹園（バナナ、パイナップル、パイナップル等）や畑の中に、農家が点在する風景は、皮が薄くて小さいバナナのおいしい味とともに、心に残っています。

人びとは、上れた果物や米、じゃがいも、とうもろこしなどのうち、家族の食べるものを残して、ほかは市場へ売りにゆきます。そうして手に入れたお金で必要なものを買うのです。

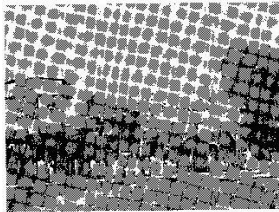
私は十人兄弟の末っ子で、一番上の兄の子どもの中には私よりも年かきの人がたくさんいます。昔は、夫多妻制でしたので、家族の数も多く、こういう家庭はよくありました。私の母が市場へ出かけると、私は門の前立って、二時間も三時間も、母の帰りを待ちました。母はよくおもちやお菓子をおみや



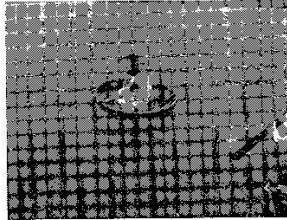
げに持ってきてくれ、それが楽しみだったのです。みやげがないときは、私は大声で泣きました。

夜になると、家々には電気ではなく、ろうそくやランプの灯りがとまります。ほの暗い灯りのもとで、母はよく私にいろいろな話もしろい話をしてくれました。私はこわい話が好きで、鬼の出てくる話をせがむと、母は両手を自分の口の中に入れて、鬼の歯のようにして見せたり、両手を頭の上につのようになり突き出したりしながら話をしてくれたものでした。

母が目を大きくむきながら話を終えると、私は外の暗がりでおシッコするのがいやで、(家には便所がないので)いつも家の裏で用を足していました。そのままベッドへもぐりこみました。そんなとき、夢の中では、家の裏でおシッコをさするのですが、その音はベッドから聞こえ、びびくりするのです。翌朝、



南部ベトナムの蓑式風景



小舟(ワン・チャイ)に乗る筆者

父から「こわい話を聞いたらいい」といって叱られました。

私は八才のときに出家してお寺で生活をしていました。ある年、私の生まれた村一帯に大洪水がおきました。私はいそいで家へかけつけました。みな飢餓でしたが、食べものは何もなく、それはひどい状態でした。私がお寺へ帰らなければならぬ口に、母は私の手に無理矢理大きな臭物をひとつにぎらせました。

私は出家してから、村のお葬式によく立ち会いました。私の村でたれかが亡くなると、土地の広さのわりに人口が少ないこともあって、隣りの村からたくさんの人びとが手伝いに来て、一、二週間滞在します。ひととおり行事がすむと、墓へ棺をおさめに行きます。(南部ベトナムは土葬です。)村の道は狭いので、車ではなく、若い人たちが二、三十人交替で棺を肩にかついで道を行います。先頭に村の旗、銅鑼、太鼓、さしがさなどを持つた人びとが行き、つぎにお坊さんがお経を誦みながらすすみます。そして花で飾られた棺、それから白い旗をきた親族、村の人と続き、葬列は二、三時間の道のりを行います。途中、他の村を通りぬけるときは、その村

の人びとは門の前に出て葬列をながめ、参列者の数が多いと、「亡くなった人は幸せものだ」などとささやきかわします。納棺をすませ、帰ってからは、みんなにちこそうがふるまわれます。

今は少し簡略化されましたが、昔は亡くなった人が出た家には、厳しい「孝」の装が課されました。親が亡くなった場合、息子は三年間、結髪してはならない、息子の夫は一年間の間、いっしょに寝てはならない、といったものです。

私は二十才のときに日本へ来ましたが、私の国では戦火はますますはげしくなり、たくさんの人たちが死んでゆきました。私の母も、この戦争で、死体が半分しか残らない痛ましい死に方をしました。兄たちも死にました。どの家でも二人か三人の犠牲者が出ました。死者の出た家が世どおり、厳しい「孝」の装を守っていたら、その処から自由な人の方が少なかったらどうと思われます。

戦争に勝っても敗けても人民は一苦しいのです。今、ベトナムは平和になりましたが、これから将来にわたってずっと、私の国で鉄砲の音が聞こえないように願ひながら、今、遠い西ドイツの地で教鞭を思うのです。

# 子どもの館

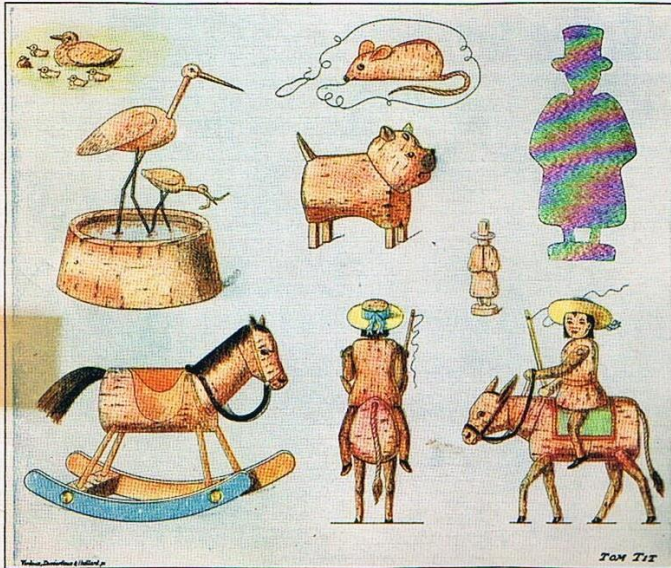
雑誌 3723-1

昭和53年1月1日発行  
 昭和48年7月13日第3種郵便物認可  
 第6巻第1号(通巻56号)  
 編集発行人=松岡道  
 発行所=福音館書店  
 東京都千代田区三崎町1-1-9〒101  
 印刷=三美印刷 製本=小林製本

定価 420円  
 送料37円



クルミのからを使った  
 工作から



コルクを使った工作

TOM IYI